

「カリブ海人の歴史」を求めて —*Caribbean Quarterly*創刊号（1949）を中心に—

堀内 真由美

教育ガバナンス講座

The History of ‘A Caribbean Man’: An Examination of *Caribbean Quarterly* Vol. 1, No.1&2 (1949)

Mayumi HORIUCHI

Department of Educational Administration and Governance, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに—「カリプソ・ローズ」の問い

「私たちはどこから来たのか」。これはドキュメンタリー映画『カリプソ・ローズ』（2011年公開、日本公開2021年）で主人公カリプソ・ローズが発する問いである。

カリプソ・ローズは、1940年に当時の英領西インド植民地トバゴ島（現、英連邦トリニダード・トバゴ共和国）に生まれたカリブ海域きっての「カリプソ歌手」である。カリプソとは、砂糖プランテーションで労働を強いられた奴隷の子孫、アフロ系西インド人（黒人）が生み出した音楽の一ジャンルで、日本でも耳にする「レゲエ」のルーツだとも言われている。

西インド植民地での音楽は、アフリカ各地から集められてきた異言語の奴隷同士が、意思疎通をはかるために発達した。1833年に同植民地での奴隷制が廃止され黒人がカーニバルに参加できるようになると、行進や余興にカリプソが演奏されるようになり認知度が上がった。カリプソは、為政者の批判から有名人の噂話、島の日常に至るまで多様な話題を歌詞にしてリズムに乗せた。支配者である本国系白人の英語とは異なる「クレオール語」（現地語）で歌われることがほとんどであることから、島民とりわけアフロ系西インド人（アフロカリビアン）にとって「意見表明」の手段としても用いられてきた。

カリプソ・ローズの誕生70歳を祝うために制作された映画の後半で、ローズが自身のルーツを求める様子が映し出される。「曾祖母らが旅立った場」を見たいと言うローズがずっと抱えてきたのが「私たちはどこから来たのか」という問いだった。彼女は、多くのアフロカリビアンにとっての「出発点」とされる西アフリカ、ベナン共和国を訪れ、現地ガイドが案内する「奴隷の門」との看板が建つ港に立った。もしかした

ら「曾祖母たち」は別の地域の港から旅立ったのかもしれない。だが、もはや辿るべき手段がローズにはない。大西洋を見つめる彼女の表情は、安堵と諦念がないまぜになっているかのようだ。

「我が国」「わが祖国」という「大きな物語」を歴史と呼び、それをプロパガンダとして、他国、他地域を威嚇する愚行がいまだ絶えない今日¹⁾、本稿では「カリプソ・ローズの問い」から始めることで、支配者が去った島々の歴史を、島民個人々の営みを包摂しつつ紡ぎ直した旧英領西インド植民地の人々の苦闘へと考察を進める。

1. *Caribbean Quarterly* への注目

CQ創刊前後の状況

本稿では、旧英領西インド植民地の歴史創造の営みを、季刊誌『カリビアン・クォーターリー』（*Caribbean Quarterly*, 以下CQと表記）の創刊第1巻、第1号、2号に掲載された論考、および初代編集人の理念を主な考察対象として明らかにしていく²⁾。

まず、CQについて短く紹介しておきたい。CQは英語圏カリブ海地域における最古の定期刊行物であり、1949年に創刊され現在も刊行されている。ジャマイカに新設された西インド諸島大学（当時は本国イギリス・ロンドン大学の海外校という位置づけ）の公開講座教育部（Department of Extra Mural Studies）によって、キャンパスの内外へ研究成果や知識が広がっていく「プラットフォームの役割」を果たすべく創刊された³⁾。

現在のホームページにも明記されているように、学問的論考以外に、個人的なエッセイや批評、大衆文学、詩、戯曲、演劇評や書評など、カリブ海文化の多様性

を反映した様々な分野の文書を掲載している。また、学術論文はピア・レビューを原則としており、いわゆる「権威ある人々」による一方的な査読を行っていないのも *CQ* の特徴である。

CQ は、ジャマイカに西インド諸島大学（以下、UWIと表記）が設立されたのとほぼ同時に創刊されたが、このことの意味は大きい。「宗主国」の大学の植民地校として出発したとはいえ、UWIは、ジャマイカをはじめ当時の英領西インド諸島植民地が、一つのまとまりある政体として政治的独立を果たそうと、宗主国イギリスとの間で重ねてきた交渉の最終段階で創立されたからだ。1958年に成立する「西インド諸島連邦」への期待と熱気が、各島の政治指導者たちの間で最高潮に達した「ジャマイカ・モンテゴベイ会議」開催は、*CQ* 創刊の1年前のことだった。

初代編集人フィリップ・シャーロック (Philip Sherlock)

CQ 創刊号で、初代編集人フィリップ・シャーロック (1902-2000) は創刊挨拶の冒頭を次のように綴った。

ロンドンからまっすぐ欧州を横断してコンスタンティノーブルに行くよりも、バリーズからポート・オブ・スペインに行くほうが遠い。ジョージタウンからキングストンまでの距離は、ロンドンから黒海沿岸のオデッサまでと同じくらい遠い⁴⁾。

コンスタンティノーブルは現在のトルコの都市イスタンブール。バリーズは中央アメリカ北東部ユカタン半島の付け根に位置し、東側をカリブ海に面した島嶼国。ポート・オブ・スペインは、現・英連邦トリニダード・トバゴの首都。ジョージタウンは現在の英連邦ガイアナ共和国の首都で、南米大陸の北東部に位置し東にスリナム、西にベネズエラ、南にブラジル、北をカリブ海と接する。キングストンはジャマイカの首都。オデッサは、2022年2月に勃発したロシアのウクライナ侵攻下、現在では「オデーサ」と改名されている。古くからロシアと欧州との文化交流拠点として知られる都市である。

シャーロックが記した「地理情報」に戻ると、当時の英領西インド植民地が、いかに広大な面積の海上に散り散りに置かれていたかが想像できよう。シャーロックはそのことをまず読者に想起させる。続けて彼は、「我々を隔てているもの」がこの遠大な距離以外にも六つあると書く。すなわち「人種」、肌の色、言語、文化的慣習、統治形態、そして教育である。

CQ が主な考察対象とする（旧）英領西インド諸島を考えると、「人種」には、本国イギリスを含む欧州系、かつての奴隷の子孫であるアフロ系、奴隷制廃止後の新規労働力としてやってきた（来ざるを得なかった）インド系、主に商業に従事するため来島した当時英国

統治下にあった中東のアラブ系、そして欧州人の来島以来、絶滅の危機にあったカリナゴ人などごく少数の先住民族が含まれる。

2番目に挙げられた「肌の色」の違いだが、これは「人種」を反映した「黒か白か黄か」というような単純な意味ではない。「白に近い色かそうでないか」という、「白」を基準とした「肌の色のグラデーション」を指す⁵⁾。ちなみに *CQ* 初代編集人を務めたシャーロックは「外見はほとんど白人」のアフロ系ジャマイカ人だった⁶⁾。

言語も文化的慣習も統治形態もそして教育も、独立に向けて制度を整えていけば、ある程度、その差異を超え「共通のもの」を構築していけるかもしれない。シャーロックの念頭にあった、「距離」以外にカリブ海人どうしを隔てるものの最大因子は何だったのかは考察を進めるなかで推察するしかない。ただ、「我々の間に孤立を生み出し相互理解を妨げてきた」六つの要因に含まれる教育が、同時に、相互理解の土台になると考えていたことは確かだ。

教育は、（略）狭い教室で過ごす年月に限られたものではない。カリブ海域で、学ぶために集まってくる男女の一群がある。かれら自身のことを知り、かれらの歴史を知り、かれらが生きる島々のことを知り、かれらを取り巻く世界をより深く知るために⁷⁾。

UWI創設の意義をこのように確認した後、シャーロックは *CQ* の使命を宣言する。「相互の結びつきを築くための知識を求める男女すべてのために創刊された」本誌は、社会的、教育的運動に注視しつつ、カリブ海域の文化的発展に寄与してきた既刊雑誌とも協同していく。そして何よりも、*CQ* はカリブ海域における学びの伝統を確立し、それを強化していくことに注力する、と。

シャーロックは、創刊第1巻第1号と第2号に連続して、ジャマイカにおける奴隷制プランテーションから今日（創刊当時）までの島民の実態報告論文を掲載している。*CQ* の「相互の結びつきを築く」という理念からは逸脱したような、同じ島の歴史を2号連続で掲載するという編集者シャーロックの意図を探りつつ、二つの論文の内容を見ていこう。

2. 「ジャマイカの歴史」が連続して掲載された理由

第1号論文 ‘A Jamaica Slave Plantation’ (1914)

創刊の第1巻第1号の「創刊挨拶」に続いて目次のトップを飾るのが第1号中唯一の歴史論文、Ulrich B. Phillips (1877-1934) による ‘A Jamaica Slave Plantation’ である。論文の冒頭、編集人からの「お断り」としてシャーロックは、1914年『アメリカン・ヒストリー・レビュー』に掲載されていたものを、今回、許可を得て再掲載すること、次号で

同じジャマイカにおける、第2次大戦後の農地再開発事業に関する論考を掲載予定であることに言及し、その上で「150年にわたる当地の農業生産と人々の生活における変化を示す」という編集サイドの意図も明記している⁸⁾。

第1号論文著者のフィリップスは、ジャマイカ植民地における大規模砂糖プランテーションの経営状態を、英国人プランター（大農園主）ローズ・プライス（Rose Price）が綴った「次世代のプランテーション管理のための情報提供」（1792-96）という記録をもとに考察している。記録の内容は、商品（財産）目録、奴隷の増減記録、家畜の調達、教区からの報酬など多岐にわたっていた。

18世紀末のジャマイカにおける大規模プランテーションの実態として特筆すべきは、「シーズニング」（Seasoning）と呼ばれる奴隷たちの「現地慣れ」についての描写だろう⁹⁾。農園主プライスの記録によれば、1793年3月に10人、10月には90人を（今日の）コンゴから買った。翌年には81人をコンゴと（今日の）ガーナから購入した。

プライスのこの記述に関して、フィリップスは「ベテランの地主なら一度に多数の新人を入れない」と指摘する。長い航海による強烈な船酔いで衰弱し、到着後も赤痢など感染症にかかる者が多く、「現地慣れ」の3年が経つ頃には、全体の5分の1が「減少」するからである。プライスの農園では肺炎や肋膜炎に罹患する者も多かった。1794年春から死亡率は上昇を続け、同年53人、翌年23人が死亡し、現地慣れが終わる頃には4分の1が減少した。船底に積み込まれ命からがら島に上陸しながら、未知の土地での労働や病で斃れた奴隷一人一人の死が、「減少」という単語で表される。

フィリップス論文が考察した農園主の記録でもう一つ注目したいのは、「奴隷労働者の内訳」だ。プライス農園および邸宅で働く奴隷の「肌の色」が次の四つに分類されている¹⁰⁾。Bは「Black」を表し「100%黒人」を指す。Sは「Sambo」（サンボ）で混血を表すが「黒人の血が4分の3」の者、同じ混血でもMは「Mulatto」（ムラト）で「黒人の血が2分の1」を表す。四つ目のQは「Quadroon」（カドルーン）つまり「黒人の血が4分の1」を指す。論文では、「産婆やナースは一人を除いて全員B」、「ガードマン31人も一人のM以外はすべてB」だと解説されている¹¹⁾。

CQ編集人シャーロックが創刊挨拶で記したように、「肌の色の違い」は「我々」の間に立ちだかる分断の壁を形成するものだった。プランテーションに連れてこられた奴隷たちが全員「B」とするならば、S、M、Qの意味するところは、いかに白人支配者とりわけ農園主らによる女性奴隷への性的搾取が常態化していたかということだ。だが、歴史家フィリップスは農園主の記録から「単なる記号」だけを紹介しているに過ぎない。ましてや、奴隷制の下で「肌の色のグラデー

ション」がどのような「かれらの中のヒエラルキー」を形成したかも書き加えてはいない。1914年に書かれた論文の限界だと言われれば、それまでではあるが。

論文の最後の部分は、「プランテーション経済」についての分析である。フィリップスは、当時、西インドの砂糖プランテーション経営に関して書かれた他の論文が、「大規模農園ほど、より大きな収益を得られる」と分析したことを示したうえで、自身による「プライス農園」分析の結論を記す。「ここは平均的農園の2倍の奴隷を抱えていたが収支は引き合わなかった」と¹²⁾。つまり、毎年、少なくとも「減少」を補いながら「平均的農園の2倍の奴隷」を抱えるに足るカネをかけ、四つの分類が成立するくらい奴隷への性的搾取を続けながら、この農園は他の多くの砂糖プランテーション同様、18世紀末に破産したのだ。

もちろん、儲からなくなった農園経営のために働かされた奴隷への言及は一切ない。その後かれらがどのように生きていったのかも。

‘A Jamaica Slave Plantation’ への評価

1914年に書かれたこの論文を、シャーロックはなぜCQ創刊号のトップに掲載したのだろうか。この論文への評価を彼は知っていたのだろうか。

著者Ulrich Phillipsをネット検索すると、彼の歴史家としての評価について、ある程度知ることができる¹³⁾。アメリカ、ジョージア州生まれの歴史家フィリップスは、アメリカ南部で奴隷制のもと行われていた大規模プランテーション農業の社会的・経済的側面に注目した研究で知られる。フィリップスは、大農園奴隷制は大きな富を生んだが、やがて経済的に行き詰まり、北部における産業革命によって、南部が出し抜かれていくことになったと指摘した。

フィリップスは、南部大農園奴隷制はあまり生産性が高いとは言えず、1860年頃にそのピークを迎え、南北戦争が起こらなかったとしてもやがて衰退していっただろうと結論づけた。彼はまた、大農園主の起業家精神を高く評価し、かれらが奴隷に対して残忍だったということを否定したことで知られている。

一方、フィリップスの研究手法は、多くの農園に残る財務記録や日誌など未使用の史料を駆使したことであり、このような手法での「パイオニア的研究が‘A Jamaica Slave Plantation’（1914）だった」と解説されている。この手法はその後注目を集めたようで、フィリップスの農園主に対する好意的な分析姿勢には否定的であっても、彼の同論文で用いた手法は、多くの研究者に引き継がれていったという。

この解説を読んで、同論文を再読すると、先に筆者が指摘した「奴隷へのまなざし」がほとんど「商品」に対する分析に終始していることが腑に落ちる。また、フィリップスの着眼点が、ジャマイカにおける大規模プ

ランテーションの衰退にあったことにも納得がいく。彼の関心は、アメリカ南部と同じように奴隷労働によって展開されていた別の場所、つまり英領ジャマイカでは、いつ頃、どのようにそれは衰退していったのか、という点である。彼の問題意識の中に、衰退し放置されたプランテーションがどうなって、元奴隷たちはどのように生き延びたのかという「それから」が入る余地はなかったようだ。

では、なぜCQ創刊号トップにこの論文が掲載されたのか。編集人として、シャーロックがフィリップス論文を読んでいなかったことは100%考えられないうえ、歴史家でもあった彼が、フィリップス論文の少なくともアメリカでの評価を知らなかったともまず考えられない。時は1940年代末のことである。奴隷主に好意的な姿勢で書かれた奴隷制プランテーション研究が、「人種」をめぐる議論が激しさを増していく時代に、他の媒体ならまだしも、CQに掲載されたとは。

奴隷制廃止後の、多くのプランテーションが儲からず衰退し打ち捨てられてからの「ジャマイカ島民」への、ほんの少しの配慮も行間にはない論文を、シャーロックは巻頭論文に採用した。彼の意図を察するに、この論文を読んだ人々—学術的文章を読み解ける読者に限られるが—の記憶に、「奴隷制プランテーション経営は割りに合わなかった」という結論を残せば良かったのではないかな。なぜなら、シャーロックが次に準備した第2号掲載論文が、その「割りに合わなかった経営の失敗」を反省することなく、支配体制を維持続けた宗主国イギリスからやってきた、一官吏による論考だったからである。

第2号論文 ‘An Experiment in Land Settlement at Lucky Hill, Jamaica’ (1949)

CQ第2号に掲載された論文の著者James Wright (1904-85) については、収集できた情報はさらに限られる¹⁴⁾。イギリスに生まれたジェームズ・ライトは1946年から2年間、ジャマイカの農政局に「上級農政官」として採用されている。論文がCQに掲載された49年には、農政局副局長に任命された。だがその2年後にはナイジェリア植民地の農政局副局長も兼任し、ジャマイカにはその後、農政局局長として62年頃まで在任した。65年夫妻でニュージーランドに移住し、当地で死去している。

論文のタイトルにあるLucky Hillは東西に細長いジャマイカ島の北東部にあるセント・メアリー (St. Mary) 教区内のコミュニティを指す。ライト論文は、この地区で主として農業用に土地を開拓し、新規住民(農業労働者)を誘致する公的プロジェクトの始まりと経緯を扱っている。

論文導入部でライトは、本論文が1940-42年の西インドの開発と住民福祉に関する議論に触発されて執筆

されたことに言及している¹⁵⁾。導入部からわかるのは、当時の西インド植民地の開発に際して、Land Settlement (新規開拓地への労働者の移住事業) に関する賛否が盛んに論じられていたことである。ランド・セトルメントは「土地利用に関する不満の一時しのぎの手段だ」とする反対派の意見を紹介しつつ、「地所の細分化に伴う小規模な土地所有の創出」は、「ジャマイカでは人気ある選択の一つとなった」とライトは書く。

興味深いのは、論文の冒頭からそう読み進まないうちに、ライトの宗主国人ぶりが露呈することである。「土地の分割と譲渡が自由をもたらすとか、禍々しい過去の時代のために、ジャマイカのアフロ系子孫の農民たちは、みずからの土地を持ちたがっているとか、雇用主に仕えるより自身の主(あるじ)になることを望んだというふうに言われている」が、「それは間違っている」として以下のように続ける。

そもそも奴隷であった時代からすでに数世代の時間が経過している。なにより、奴隷になる前にも西アフリカの大地は、かれら個々人によって所有されていたとは言い難い¹⁶⁾。

ライトは、このように「かれら」が「土地の所有」に執着していないという「伝聞」を、奴隷制と奴隷制以前の西アフリカ時代の「かれら」から推し量って正当化している。そのうえで、さらに、「近年のジャマイカ」の傾向として、「かれら」が土地に対して執着するよりも、むしろ定期的な収入源や警備を望むようになっていいると書く。

ライトは、1940年に始まったラッキー・ヒルにおけるランド・セトルメント事業に途中から関わった責任者の一人として書いている。本論を読み進めると、この事業が当初の計画通りには実行されず、数回、計画の「根本的な見直し」があったことも明らかになる。計画実行過程の一責任者であるライトの焦燥は十分読み取れる。

ライト任期中の1952年から、ボーキサイトの採掘が急速に進められたが、それ以前は人口の大部分が農業に依存していた。もともと狭い耕地面積しかないジャマイカ島では、20世紀に入ってバナナの輸出が一大産業として一時期栄えたが、長くは続かず、病虫害の発生と第二次大戦の勃発によって衰退した¹⁷⁾。

バナナ栽培はセント・メアリー教区でとりわけ盛んであったことから、ライトは、同教区におけるランド・セトルメント事業で、農業指導も任されていたのではなかと推察する。実際、論文の「資産運用」の項目の中に、「畑からの収穫物」、「果樹園からの収穫物」、「乳牛・肉牛の価値」などが細かく記載されており、とくに「果樹園」では、バナナ、ココア、プランテン (バ

ナナに似た芋の一種で加熱調理して主食の代用にもなる作物)、コーヒーに、それぞれ割り当てる耕作面積が記されているほか、収入源になるはずだったココナッツが、海拔1000フィートという立地ではうまく収穫できなかったことも綴られている¹⁸⁾。

収穫物のほか、事業主体を構成する組織についての細かな報告を読んでいると、彼自身が「任務」に忠実な人物だったことは推察できる。それゆえに、事業の下、実際に入植し労働に就く「かれら」への観察描写との落差が目立つ。

先に指摘したように、奴隷制の下でのみならず、ジャマイカに連行されるまでの西アフリカでの「かれら」の状況を大胆に推論し、それを論文に綴ることのできる、ある種の無神経さは、第1論文の著者フィリップスにはなかったものだ。1877年生まれのフィリップスは、南北戦争の記憶も生々しく残る社会を生きたが、1904年生まれのライトは、1865年に起こったジャマイカ「大反乱」を機に、黒人の政治参加を排除するため同島が英領直轄植民地になったことはおそらく知らなかっただろう。

他方で、ジャマイカでは労働運動が高まり、同時に直轄植民地から自治権を奪還する政治的要求運動も盛んになっていった時期は、ライトの青年期とびたりと重なる。つまるところ、ライトは西インド植民地の出来事には関心すらない、当時の平均的本国人だったということだろう。彼にとってジャマイカは職場のうちの一つであり、ナイジェリアも「出張先」以外の何物でもなかったのだろう。その一方で、指導対象としての島民は、単なる「未知の島に暮らす人々」ではなかったようだ。

計画への障壁となる要因について、ライトは「計画に関わった人々は、土地の管理についての発言権があり、その運営における利益に関心があった」と、その多くが英系白人の子孫である「島の地主層」による計画への参画を記している。地所は細分化されず一つの単位として開発され耕作される計画だった。にもかかわらず計画の進捗を阻んだのは、一つには当局、つまり農政局を中心とするジャマイカの行政側の怠慢と、もう一つには、「土地の生産性を上げる努力をマイナスにしてしまう」現地の島民だという。

ジャマイカは旧英領西インド植民地のなかでもアフロ系が人口の大半を占めていた。「土地の生産性を上げる努力をマイナスにしてしまう」要因は、アフロ系島民の「非嫡出子」の多さや「大家族」という家族構成にあるとライトは指摘する¹⁹⁾。ジャマイカでどれほど有効な土地利用ができたとしても、このような要因が人口増加を引き起こし、農業生産に支障をきたすというのがライトの見立てだった。島内の計画のなかでも有望な土地であるラッキー・ヒルにおいては、「家族単位が共同体の基本であり、可能な限り心地よい環

境にすることが重要だ」との考えを示している。

ライトは、農地の生産性の向上に関して、本国人の「性道德」を無意識に分析の基準に据えている。かつて多数の女性奴隷に「お手つき」をした挙句、黒人女性は「性的に放縦だ」というステレオタイプを押し付けた「本国白人紳士たち」の悪行を、ドミニカ島生まれの作家ジーン・リースは『ジェイン・エア』(1847)のスピノフ版とも呼べる『広い藻の海』(1966)で描いた²⁰⁾。ライトのジャマイカ(アフロ系)島民へのまなざしは、リースが批判した19世紀的なものから変化していないようだ。

計画の進行の遅れに「島民の生活スタイル」を大きな要因としたライトは、もう一つの要因として、島民個人々人への教育と訓練が不足していると書いている。教育と訓練で島民に身につけさせたいのは、「自立性、自尊心、協調性といったものである」。つまりは、これらがジャマイカ生まれのアフロ系島民には欠けているということなのだろう。

以上のようなラッキー・ヒルの開拓と開拓地への農業労働者移住事業についての報告を、CQ創刊第2号に掲載した編集人シャーロックの意図はどこにあったのだろうか。論文掲載のカギは、おそらく「教育の必要」というライトの「提案」だろう。

もちろん、ライトは「劣ったかれら」に最低限の教育・訓練を施さないと計画が台無しになるという文脈で「教育」という語を使った。そして、これからの入植者には読み書きができる者が多ければ多いほど良いとも書いている。そこをシャーロックは逆手に取った。彼は文字通りの「教育の必要性」を、この論文から引き出した。賃金を得て自立的生活を営んでいくこれからのジャマイカ人には、「肌の色の濃淡」も「嫡出子か否か」の違いも関係なく、教育を受けてもらおうというメッセージを送る、そのために第2論文は掲載されたと考えられる。

編集人の最大の意図と1940年代ジャマイカの状況

以上、CQ創刊第1巻、第1号、2号に掲載されたジャマイカに関する論文内容を考察し、掲載責任者である編集人シャーロックの意図を推測してきた。ここでは、彼の意図を、「時代」をキーワードにもう少し深く読み解いてみたい。

2論文の発表年の隔たりは大きく、両論文の著者は二人とも「ジャマイカ人」ではなかった。前者は「奴隷主に好意的な姿勢」を示す歴史家として知られており、後者は、農業指導者としてやって来た本国の役人だった。それでも初代編集人シャーロックは「150年にわたる当地の農業生産と人々の生活における変化を示す」ことを表むきの掲載目的とした。

掲載論文を通して明らかになったことは、「奴隷労働を使った大規模プランテーションの衰退の背景」と

「農業生産のための耕地開拓と労働者の入植促進事業の難しさ」である。ジャマイカの砂糖生産は、競合する仏領西インド諸島やブラジル産砂糖の生産高に太刀打ちできず18世紀末から衰退していった。しかしその後、奴隷制廃止を挟んで、「かれら」はどう生き延びたのか記述がないまま、いきなり、第2論文が報告する「今」すなわち1940代末の農地開拓事業に飛ぶ。そしてそこでも、「かれら」は何をどうして生きてきたのが明確にはならない。

したがって、「150年にわたる当地の農業生産と人々の生活における変化」は、読者が想像するしかない。ただし、奴隷解放前後の記憶をとどめる社会に生きてきた当時のシニア世代の島民ならば、慢性的な雇用不足と、「奴隷主」が「地主」に代わっただけの農地で低賃金農業労働者として生きてきた実感があっただろう。だが、若い島民には共有できない過去である。奴隷制プランテーションの痕跡がほぼ消えた島に生まれた若い島民のなかには、かれらの先祖の生々しい生と死の記録をはじめて知る者があつたかもしれない。だとしたら、「それまで共有できなかった過去」の提示こそ、シャーロックの最大の意図だったと言えまいか。

ジャマイカの1940年代末という時代を振り返ると、いっそう、シャーロックの意図が浮き上がって見えてくる。40年代は、1910年代半ばにアフリカ植民地の解放を訴えたジャマイカ生まれの活動家、マーカス・ガーヴェイ (Marcus Garvey, 1887-1940) による黒人の意識覚醒運動の影響を受けた世代が、社会に出る頃だ。

シャーロックは1902年生まれなので、少年期にガーヴェイの思想に触れ、学業を積んでいた頃に大恐慌下の島を覆った労働争議を目にした計算になる。その後も続く労働運動が、自治権を求める政治運動と合流し全国に広がる様子を、彼は、黒人には事実上門戸が閉ざされていた中等学校 (secondary schools) の校長として見ていた。この時代の政治指導者であったノーマン・マンリー (Norman Manley, 1893-1969) とマンリーのいとこアレクサンダー・バスタマンテ (Alexander Bustamante, 1884-1977) が、それぞれ人民国家党 (PNP) とジャマイカ労働党 (JLP) を結党し、本国政府に働きかけ、英領西インド諸島で最も早く普通選挙による議会の設置に成功する。CQ創刊の5年前、1944年のことだ。同年、シャーロックは異例の若さで西インド大学ジャマイカ校設立準備委員会のメンバーとなっている²¹⁾。

つまり、CQは、ジャマイカ植民地が実質的な自治権を獲得し、新生ジャマイカに見合う学術・文化の確立の必要に直面した時期に創刊されたと言える。その学術・文化確立の任にあったシャーロックはおそらく腹をくくったのだ。これまで自前の歴史叙述を持たなかった島民にとって、奴隷主に好意的な姿勢を示すアメリカ人歴史家の論文であろうと、砂糖プランテー

ションで荒廃した島での「再開拓事業」のため本国から赴任してきた役人の報告であろうと、そこから、「共有しなくてはならない過去」を取り出し、自前の歴史叙述の土台の一部にするしか、他に方法がないのだと。

3. 編集人シャーロックの「カリブ海人」への覚醒

CQ初代編集人フィリップ・シャーロックによる創刊1号、2号への「ジャマイカ史」掲載にこめた彼の意図を探って来た。ただし、この2論文と掲載前後のジャマイカおよび英領西インド諸島の状況を照合させても、編集人としての目的意識が彼の言によって語られていない以上、あくまでも推測の域を出ない。

とはいえ、初代編集人であった彼のキャリアを振り返って論じているのは、管見の限り、彼の死の直後2000年と2001年にCQに掲載された2本の追悼文しかない²²⁾。いずれにおいても、シャーロックが1962年の「西インド諸島連邦」崩壊後の事実と直面してもなお、西インドの統合にこだわっていたこと、「カリブ海人」として「我々は何者か」と問い、問いへの考察を深めるための教育に生涯を捧げたことなど、「一つの西インド」理念と「カリブ海人」意識醸成を教育活動によって発信し続けたシャーロックが称賛されている。

彼が自身のキャリアを振り返り叙述している文章に行き当たらないなか、筆者が入手できた唯一の資料が、CQ編集者時代からはかなり時間は経過するが、当時80歳になっていた彼へのインタビュー記事だった²³⁾。そこではCQ編集人としての活動は語られていないが、追悼文で形容されていた「カリブ海人」としての自覚を持つに至る経験や思考の変化がうかがい知れる。

本稿での考察の最後に、シャーロックみずから語った「カリブ海人」として覚醒の道程を確認し、最晩年に彼が歴史家としてどのような歴史叙述に行きついたのかにも言及したい。

「カリブ海人」(‘Caribbean Man’) 誕生過程

‘Caribbean Man’ と題されたインタビューは1982年の12月と翌年2月に計4回、ジャマイカの首都キングストンで行われた。聞き手はエドワード・ボウ (Edward Baugh, 1936-)。西インド諸島出身者で初のノーベル文学賞を受賞した詩人・劇作家デレク・ウォルコット (Derek Walcott, 1930-2017) 作品評論の第一人者であるボウは、1968年からシャーロックの亡くなる2000年までUWIのジャマイカ・モナ校で教鞭をとっている。つまり、シャーロックにしてみれば一世代若い同僚であり、長年交流のあった友人でもあった。

まず、専門領域を尋ねられたシャーロックは、「歴史」だが、既存の伝統的な「歴史学」ではないと断っている。「それは、人間の精神や環境に影響を与える思想や技術の歴史であり」、「人間の動きという大きな意味

合いで言うところの歴史」だと解説している²⁴⁾。「歴史」への解説の意味するところは、その直後から語られる彼の教育歴や職歴へと読み進めると、よりいっそう明確になる。

職業を尋ねられたシャーロックは、教育における「販売外交員」(a commercial traveller)だと答えている。教区牧師であったシャーロックの父親は、当初、イギリスのメソジスト系全寮制学校に息子を進学させたがっていたが、費用のかかる全寮制ではなく、教師と牧師の子弟の入学が優先される、地元の新設中等学校に進学する。

おそらく現在の教育システムでいうところの「シックス・フォーム」(高等教育機関に進学するための、中等学校課程修了後の2か年の就学期間)を終え、シャーロックは中等教育機関で教える免許も取得したようだ。だが、教員になるつもりはなく、銀行員になろうと思っていた。ところが母校の恩師から、病気による欠員が出たので助けてほしいと要請され、「たまたま教師になった」。しかし、いったん教え始めると、それが自分でも好きになっていく²⁵⁾。

母校で1927年頃まで働き、次の男女共学校では、25歳の若さで校長として赴任した。2年間在職し再び母校に戻る。そして3年後、名門とうたわれた中等学校に、1932年校長として赴任する。

この名門校で若き校長として在職した6年間で、シャーロックは感慨深げに振り返っている。名門校としての誇り、学校への忠誠心、スポーツ大会や学業での成果に対する高い世評²⁶⁾。一方で、校長として気になっていたこともあった。まずは生徒全体に見られる体格の貧弱さである。「体育の授業が必要だ」と思ったシャーロックは、さっそく教員に働きかけ実施した。体育以外に新しい授業としてシャーロックが実践したのが、「公民科(市民論)」(civics)だった。本稿でもすでに見たように、1930年代ジャマイカは他の西インド植民地と同様に、「政治の時代」に入っていた。卒業生たちの同意もあって、公民科は職業教育とも結びつけ実施することになった。

充実した名門校での校長時代だったが、シャーロックは徐々に「教師は権威になってはまずい」と考えるようになる。自身の成長のためにも場所を変える必要があると悟ったシャーロックは、事務局長としてInstitute of Jamaica(ジャマイカ研究所)に異動する。ジャマイカ研究所は1879年に当時のジャマイカ総督が設置した国の文化機関で、国立美術館、国立歴史博物館、アフロカリビアン研究所、こどもセンターなどを統合・指導する組織である。その事務局長に本国系(白人)以外のジャマイカ人が求められたのは、「時代」の恩恵、つまり「国という感覚」が自分を求めてくれたのだと彼は語る²⁷⁾。

シャーロックがこの時に言及した「時代」や「国と

いう感覚」について、聞き手のボウは、30年代半ばから40年代にかけての時代、今日「ニュー・ジャマイカ」と呼ぶ興奮に満ちた時代を、シャーロックが何に影響を受けてどのように生きていたのか問うと、「最も影響を受けたのはマーカス・ガーヴェイだった」と答える。

自身の口から語られるガーヴェイから得た影響は、シャーロックの歴史観に及ぼすほど大きかったことがわかる。「君たちには歴史がある、君たちには誇れる歴史があることを知り、歴史のなかで英雄たちが成し遂げたことを知らねばならない」というメッセージを、シャーロックはガーヴェイから受け取った。おそらくこれが、その後の歴史家シャーロックが何をどう叙述するか、その方向性を決めたと思われる。

シャーロックは新人教師時代に話を戻し、歴史を教え始めた頃のことを語る。当時はイギリス帝国史を教えなければならなかった。彼は、校長に、「西インドの歴史、ジャマイカの歴史を教えられないでしょうか」と問うた。校長の返事は「君たちには歴史がないから。」だった。「丁寧に穏やかに」そう言われた時、いったんは受け入れる気持ちになったが、すぐに疑問を持ち始めたという。シャーロックは、「ジャマイカにおける変化は急に始まったのではなく、カリブ海域中に異論が発せられ、意義ある何かが生まれ始めていた。それが古い植民地主義的な姿勢への一撃となる前兆だったのだ」と語る²⁸⁾。

中等学校教師からジャマイカ研究所の事務局に異動し、ジャマイカの文化的発展と政治・経済的発展とを連結させることを意識し始めたシャーロックは、初仕事として西アフリカの彫刻や金属細工の展示を担当した。この企画は大人気を博し、シャーロックは再びガーヴェイの「君たちには歴史がある、君たちには誇れる歴史があることを知り、歴史のなかで英雄たちが成し遂げたことを知らねばならない」というメッセージを想起したという。

研究所在職中に、ある委員会が発足した。それは西インド植民地に高等教育機関を設置するため、本国が立ち上げたものだった。ジャマイカ、トリニダード、バルバドス、英領ギアナから委員が選出されることになり、シャーロックがジャマイカ代表に任命された(1944)。

大学設立準備委員会で、シャーロックは成人教育の必要性を感じ実行に移す。この間、彼はJamaica Welfare(ジャマイカ福祉財団)でも教育担当として働いた。同財団はノーマン・マンリーが37年に立ち上げ、地元企業などから資金を募った結果、運営にこぎつけた福祉団体で、農業労働者を中心にしたコミュニティをジャマイカ各地に作っていった。シャーロックは土地の土壌改良などの労働に関わるなかで、「ジャマイカの労働者(シャーロックは‘working man’と

言った直後、「当然それは‘working man and woman’のことを指す」と補っている）たちへの大いなる敬意を覚えた」という²⁹⁾。先に考察したCQ第2号掲載論文の著者ライトも、この財団については「土地改良の事業主体者の一つ」としてほんの短い言及をしているが、同時期にシャーロックは、現場に入り一緒に汗を流して働くなかで、「新しいジャマイカを造る」という、独立に向けたスローガンを実感していた。

ジャマイカ研究所での西アフリカ文化の紹介や、ジャマイカ福祉財団での労働体験で得られた現場感覚を携えて、シャーロックは、1947年末UWI前身であるUniversity College of the West Indiesの公開講座教育部長に任命され、資格取得に限定されない多種多様なプログラムを実施する。舞踊や演劇、絵画などを通して「文化的創造の機会を高めること」にいそしんだ³⁰⁾。このプログラム作りには多数のアーティストとの協同が必須となり、セント・ルシアからは演劇科目に関して多大な協力を受けたと回顧している。

この話を受けて聞き手のボウは、「それがまさにカリブ海人に典型的な視点ですね」と興奮気味に畳みかける。ボウは「カリブ海域を見渡す視点」を持つ人を‘Caribbean man’と呼んでいる。シャーロックは、公開講座担当部局の長として、当時の英領カリブ海を旅して回ったことに言及する。インタビュー冒頭で彼が自身を教育における「販売外交員」だと定義した理由がわかる。アンティグア、セント・キッツ、トリニダード、それぞれの島で（記事にはなかったが、ちょうど「西インド諸島連邦」が成立中のことだ）、シャーロックは「島国人」(insular)ではなく「カリブ海人」たちに合えたことが幸いだったと振り返る。

60年から3年間は、新設されたUWIトリニダード校校長として、現地に赴任し、新キャンパスの指揮を執った。シャーロックは「ここで私は東カリブのことを学んだ」と言う³¹⁾。これは、シャーロックのCQ創刊号の編集人挨拶の冒頭文を思い出させてくれる。49年の段階では、おそらく地図上の距離の隔たりがいかにほどかを頭では理解していただろうが、その後の仕事を通して、距離の隔たりは実感しつつも、他方で、彼は「カリブ海人」へと視野を広げていったのである。

その後ジャマイカに戻り、69年までUWI実質のトップである副学長を務め、インタビュー直前の79年まで、カリブ海域内の大学連合(UNICA)の事務局長として働いた。この記事のタイトル通りの「カリブ海人」としての職務を果たした人生だと言える。

おわりに一自前の歴史叙述を諦めなかった編集人

インタビューの終盤で、聞き手のボウはシャーロック副学長在任中に起きた「ロドニー事件」への感想を尋ねている。「ロドニー事件」(The Rodney Affair)とは、当時UWIジャマイカ・モナ校でアフリカ史を

担当していた教員でブラック・パワー運動活動家でもあったWalter Rodney (1942-80) が、1968年10月、カナダのモントリオールで開催されていた黒人作家会議に出席し、ジャマイカに帰ろうとしたところ再入国を拒否され、勤務校からも解雇された事件である。

大学では学生たちによるデモが激化し、デモ隊はロドニーの再入国拒否を指示した首相ヒュー・シアラー(Hugh Shearer, 1967-72在任)の公邸を取り囲み、国会議事堂にも押し寄せた。デモ参加者の数は膨れ上がり、死傷者も出た。ロドニーの再入国を拒んだ背景には、冷戦下による「ブラック・パワー取り締まり」と「マルキストの排除」があった。とくに首相シアラーは、ブラック・ナショナリズムによる「カリプソ・スタイル」の革命を警戒していたという³²⁾。

インタビューでの問いに答えてシャーロックは、ロドニーが極めて優秀な歴史研究者であったこと、彼がブラックの歴史、アフリカの歴史の重要性を何より熱心に知的に訴えていたと総括する。実はこのインタビューの2年前、1980年にロドニーはガイアナの首都ジョージタウンで、車に仕掛けられた爆弾によって暗殺されている。西インド諸島でようやく積み上げられつつあった「我々の歴史」叙述は、冷戦という時代に、アメリカの政治的・思想的介入によって、表明することすら危険視されていたのである。

シャーロックはこの「我々の歴史叙述」の暗黒時代をどう生きたのか。答えは彼の最晩年の*The Story of the Jamaican People* (1998)に見つけることができる。434頁に及ぶ、文字通り「ジャマイカ人の物語」である。カリプソ・ローズが映画の中で発した「我々はどこから来たか」という問いにも、アフリカの歴史を紐解きながら丁寧に解説している。特筆すべきは、シャーロックが、ロドニーが積み上げてきた（そしてそれゆえ冷戦下の支配者に排除された）アフリカ史を底本にしていることだ。

「我々の想像での旅はルーツを求める旅であり、歴史的連続性を実感する旅である」とし、その旅が「我々の自己認識や自己尊厳を育んでくれる」と書く。そのうえでシャーロックは、「我々の旅案内をしてくれ旅の道連れとなってくれたのは、二人の西インド人で二人ともかつて西アフリカに住み働いた人物だ」として、歴史家ウォルター・ロドニー、詩人エドワード・ブラスウェイト(Edward Brathwait, 1930-2000)に感謝を捧げている³³⁾。

ただし、ロドニーの著作名は本文中シャーロックが引用した部分にも記載はなく、巻末の文献一覧にもない。時系列に進む本書の最終章、独立後のジャマイカの叙述内にもロドニーは一切登場しない。ロドニーへの個人的言及を最小限に留めつつ、シャーロックは、冷戦という新たな混乱で「排除されたアフリカ史家」による言説を範として、アフリカン・ジャマイカンのルー

ツとアイデンティティ確立の歴史を記したのである。

【本研究はJSPS科研（課題番号20K12457）の助成を受けた】

註

- 1) 2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵攻を受け、「国家の歴史」につきまとう神話や英雄譚あるいは優生学的民族至上主義が、政治・外交の場にさえ堂々と登場する現状に危機感を呈する議論が起こっている。例えば次の諸論考が参考になる。「特集：歴史否定論—克服は可能か」、『世界』2022年9月号（No.961），pp.129-191.
- 2) 筆者は科研費助成によって1949年第1巻から72年第18巻までを入手した。現在CQは英国Taylor & Francisから出版されている。筆者が入手したのはリプリント版であり，Taylor & Francis日本支社の代理店である「丸善雄松堂」を通して購入した。
- 3) CQ History, The University of the West Indies, <http://www.uwi.edu> (11/Aug/2022閲覧)
- 4) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, p.3, KRAUS REPRINT, 1970.
- 5) 旧英領西インド諸島植民地における「人種間関係」および「肌の色のグラデーション」が引き起こす島民間の齟齬や，結束の障壁となっていた経緯などについては次の論考を参照：
堀内真由美「クリオール女性の脱植民地経験—「西インド連邦」閣僚フィリス・オーフリー」，イギリス女性史研究会『女性とジェンダーの歴史』第3号，2015年11月，pp.21-31，同「郷愁と確執と，クリオール女性の描く「故郷」—ジーン・リースとフィリス・オーフリーのドミニカ島」，愛知教育大学『研究報告』第67輯（人文・社会科学編），2018年3月，pp.11-19.
- 6) <https://www.encyclopedia.com/history/sherlock-philip> (11/Aug/2022閲覧)
- 7) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, p.3, KRAUS REPRINT, 1970.
- 8) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, p.4.
- 9) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, p.5.
- 10) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, p.6.
- 11) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, pp.6-7.
- 12) CQ, Vol.1 (1949-50), No.1, pp.12-13.
- 13) https://en.wikipedia.org/wiki/Ulrich_Bonnell_Phillips (14/Aug/2022閲覧)
- 14) [https://en.wikipedia.org/wiki/James_Wright_\(Jamaican_politician\)](https://en.wikipedia.org/wiki/James_Wright_(Jamaican_politician)) (14/Aug/2022閲覧)

- 15) CQ, Vol.1 (1949-50), No.2, p.29, KRAUS REPRINT, 1970.
- 16) CQ, Vol.1 (1949-50), No.2, p.29.
- 17) 山口岳志「西インド諸島の経済開発—旧西インド連邦の場合—」，『駒澤地理』第4.5合併号，1968年，3月，pp.96-97.
- 18) CQ, Vol.1 (1949-50), No.2, p.35.
- 19) CQ, Vol.1 (1949-50), No.2, p.30.
- 20) 堀内真由美「英領西インド・白人クリオールの「植民地責任」—ジーン・リースの作品から」，愛知教育大学『研究報告』第63輯（人文・社会科学編），2014年3月，pp.73-81.
- 21) <https://www.encyclopedia.com/history/sherlock-philip> (11/Aug/2022閲覧)
- 22) Rex Nettleford, 'Sir Philip Sherlock: Founder and First Editor of *Caribbean Quarterly*' , CQ Vol.46, Nos. 3&4, September-December, 2000, pp.193-196., Jean Smith, 'Philip Sherlock: A Caribbean Giant' , CQ Vol.47, No.1, March 2001, pp.1-6.
- 23) An Interview Conducted by Edward Baugh, 'Caribbean Man: The Life and Times of Philip Sherlock' , *Jamaican Journal*, Vol.16, No.3, August 1983, pp.22-30. 本記事の入手にあたっては，千葉工業大学，中村達氏（カリブ海文学）の援助を得た。
- 24) Edward Baugh, op. cit., p.22.
- 25) Ibid., p.24.
- 26) 同時代のジャマイカにおける女子教育の実態と，イギリス本国の中等学校とりわけ女子校の実態については，次の拙著を参照。堀内真由美『女教師たちの世界—周一小公女セーラからブラック・フェミニズムまで』，筑摩書房，2022年2月。
- 27) Edward Baugh, op. cit., p.26.
- 28) Ibid., p.27.
- 29) Ibid., p.28.
- 30) Ibid., p.28.
- 31) Ibid., p.29.
- 32) English and Drama blog, The Banning of a Man and the Making of a Book: The Walter Rodney Affair, 1968, 27/Sep/2019, The British Library, <https://blogs.bl.uk/english-and-drama/banned-books/> (26/Aug/2022閲覧)
- 33) Philip Sherlock & Hazel Bennett, *The Story of the Jamaican People*, Markus Wiener, 1998, pp.102-103.

(2022年9月15日受理)